

グッドプラクティショナー 紹介

推薦文

久野晶詔さん，千葉 翼さんを
グッドプラクティショナーに推薦する理由

ふるさとの会は、1990年に東京・山谷で炊き出しなどの路上生活者支援の団体として産声を上げ、99年に法人化した。現在は宿泊所、グループホーム（共同生活援助）、就労支援ホームなど多くの事業を運営している。

生きづらさを抱えて孤立する人々を街角で見つけ出し、個々の人生に寄り添って温かく支援すること、それを理論や価値として社会に発信することなど、幅広いソーシャルワークを会は行っている。そこにはソーシャルワークの原型とともに、現代にも欠かせない普遍性を見ることができると。

その援助は、食事や住宅などのニーズを物理的に充足するにとどまらず、人として尊厳をもって生きることを叶えるものである。共同居住の場で利用者は仲間と交流し、役割、承認、信頼、誇りを獲得していく。その実践は「共同性の回復支援」として、会の理念を体現している。

その最前線に立つ2人のソーシャルワーカーの思想や実践は、地域社会で暮らすための自立支援とは何かを私たちに雄弁に語りかけるものである。

(推薦者：東洋大学社会学部教授 加山 弾)

〈グッドプラクティショナーについて〉

1 背景と目的

- ・よりよい実践を発掘・評価し、広く伝えることにより、よりよい実践が拡大することを目指す。
- ・よりよい実践を行っているソーシャルワーカーの仕事ぶりを紹介することによって、よりよい実践とは何か、よりよい実践のためには何が必要か、などについて読者に考えていただく契機を提供する。
- ・これにより、ソーシャルワーク学会として、理論の発展だけでなく実践の向上を、また、理論と実践の往復運動の促進を目指す。

2 方法

- ・推薦者から候補者名をあげていただき、その推薦理由(200~400字程度)を書いていただく。合わせて、候補者に執筆の承諾をとっていただく。
- ・候補者は学会員以外でも可能。執筆内容は「実践内容」。
- ・承諾を得られた候補者には、編集委員会から「私の実践：ー」といったタイトルで、実践内容を紹介していただくように依頼する(3,200字程度)。

私の実践

「共同性の回復支援」で仲間をつくる

久野晶詔・千葉 翼 (ふるさとの会)

1. はじめに

NPO 法人ふるさとの会は、もともと東京の「山谷」と呼ばれる日雇い労働者が多く集まる地域で、路上生活者の方々に炊き出しを行うボランティア活動からはじまった。単身生活困窮者が地域のなかで、安定した住居を確保し、安心した生活を実現し、社会のなかで再び役割や人としての尊厳・居場所を回復するための支援を事業として行っている。遠いふるさとを離れて山谷地域に集まった方々の「第二のふるさと」でありたい、という願いが「ふるさとの会」というネーミングには込められている。

筆者のひとりである久野は、ふるさとの会に入社する前は、不動産会社で家を売る仕事をしていて、飛び込み営業をした団地で孤独死の問題に直面し、その背景になにがあるのか知りたいとおもった。福祉についてはまったくの素人であったため、専門学校に通ってソーシャルワーカーとしての資格を取得後、「さあ、やるぞ!」とふるさとの会に飛びこんだのだった。しかし、そこで出会った方々は私の想像をはるかに超えていた。たとえば、癌を患い、医療や介護サービスをいれても、ちょっとした体の息さですぐに救急車を呼んでしまう。医師やヘルパーがくるまでのわずかな時間を待つこともできない。搬送された病院で頻回にナースコールを押してしまい、あげくの果てには病院から追い出されさえてしまう。こういった方々に対して、単に住居を確保し、福祉サービスを提供するだけでは、日々の暮らしがすぐに

破綻してしまうのは目に見えている。なぜなら彼ら／彼女らの根底には、癒しがたいような孤立感や寂しさが根強く潜んでいるからだ。

ふるさとの会では、そのような生きづらさを抱えた方々をどのように地域で支えていくかという課題に取り組んできた。以下では支援の実例を紹介してみたい。

2. 実践事例 1

ふるさとの会には、元山谷の日雇い労働者で、高齢化と病気のために支援が必要になった方が多かった。A さんも、そんな元日雇い労働者のひとりである。区内で独り暮らしをしていた彼は、年々認知症が進行。そのあげく、火の不始末でボヤを起こしてアパートを退去せざるをえなくなり、ふるさとの会の共同居住で受け入れることになった。

認知症のさらなる進行とともに、徘徊の問題、食事拒否の問題、夜の寂しさからの不穏等々、さまざまな課題が生じた。そのときに実践したことは、支援者だけで対応するのでも抱えこむのでもなく、生活をともにしている他利用者の方々とミーティングを開いて現状の課題について相談し、「いちばんつらいのは A さんだよ」という一致点をおして仲間になってもらい、各々が役割を担いあいながら、みなで彼を支えてゆくことだった。これを、われわれは「共同性の回復支援」と呼んでいる。

たとえば、食事の拒否があるけれども、仲間が横で食べているのを見るとどうやら食べる意欲が

沸くようだ、というところから、好物のお稲荷さん軽食会を開いてみんなでいっしょに食べることに。また、ひとりで夜を過ごすのが不安で夜な夜な悲鳴をあげるのであれば、お泊り会イベントを開いて、仲間の寝息の聞こえる空間のなかで安心してもらうこと。そのようにして、決して孤独にならないように、仲間同士での家族的な関係をつくっていった。

Aさんは、そのままなじみの山谷という町で、仲間たちに囲まれながら看取られていった。没後、偲ぶ会を開いた際に仲間のひとは、「俺も最後はAさんみたいに囲んでもらいてえなあ・・・」とつぶやいた。仲間を支えながら、同時に仲間によって支えられること、この両面こそが大事なのだ。

3. 実践事例2

上記のような、区内在住の元山谷の労働者・高齢者と比較して、最近の利用者像で特徴的なのは、区外からやってくる若年で精神的な障がいのある方々である。

たとえば、さきほどのAさんを支えたメンバーのなかに、Bさんという30代の利用者がある。彼の生い立ちは、虐待やいじめ、自殺未遂等々過酷なエピソードに満ちていた。精神科病棟を退院したあと、彼は見ず知らずの山谷にやってきた。

特徴的だったのは、その自己語りの仕方である。自分のつらい経験を、ひたすら1時間も2時間もループのように繰り返す。話せば話すほど、自分の悲惨なストーリーの渦に巻き込まれ、ますます悲愴なメンタリティのなかに陥っていく。そうした自己語りに自身が自縛されているかのようにだった。

われわれ支援者は、共感関係を築くために日々傾聴に励んだ。ところが、傾聴への要求はますますエスカレートするばかりだった。もちろん、社会資源とのさらなる連携作業もおこなった。精神科の医師に悩みごとを相談し、処方薬の調整をしてもらうのと並行して、訪問看護の導入も進めて

いった。しかし、彼の孤独感は和らがなかった。さすがに支援者も参ってしまっていた。

ちょうど、Aさんの支援課題が浮上してきた時期だった。Aさんを支えるミーティングをおこなうとき、試しにBさんにも声をかけてみた。「みんなで応援してあげようよ!」と快諾だった。これが支援面におけるターニングポイントとなった。先述の軽食会イベントでは、Aさんの車いすを介助したり、食べるときにやさしく声かけしてくれたりした。お泊り会イベントでも、夜の深まりを怖がる彼をやさしくなだめてくれたり、隣で添い寝をしてくれたりもした。重要なのは、このように、さまざまな役割をほかの利用者の方々と共に担い、それぞれの役割を互いに承認しあうことを通して、仲間同士での相互交流と支えあいが生まれたことだ。

とあるとき、Bさんの悩みミーティングが自然発生的に行われていた。ボクは道によく迷う。すぐに物事を忘れてしまう。そんな自分が情けない。これまでのいろんな悲しいことを毎晩思いだしてねむれなくなってしまう。つらくて仕方がない。そのようにBさんは滔々と嘆く。仲間たちは、そんな彼の泣き言に親身に付き合いつつ、自分のつらい体験談を引き合いにだして共感してくれたり、気分転換になるからいっしょに毎朝散歩してみないかと提案してくれたりもした。

この仲間とのお散歩は、5年後のいまでもつづけられている。そのなかで、近所の住民とも顔なじみの関係となり、道に迷うこともなくなり、浅草界隈の地理にも詳しくなり、彼にとってかつては見ず知らずの疎遠な場所にすぎなかった山谷界隈は、なじみの「地域」へと意味が変容していったのだ。

それと並行して、語りの形式が変わっていった。かつてであれば、過去の悲壮な経験の繰り返しだったのが、そこに過去のみならず未来という時制が、そしてその未来への期待感が、エピソードのそこかしこにそよ風のように吹きこんでくるのが、話を聞いているとよく実感できた。この変化の要因とはいったいなんだろう。われわれは、そこに作用しているはずの「共同性のはからい」

をこそ重要視している。共通する体験をもつ仲間との交流、「もっともよわいひと」を助けるための仲間との役割関係、その過程で生じる仲間からの承認を通して、他者に対する信頼、そして自分が他者を支えているのだという誇りをおのずと抱けるようになること——共同性が実感されるこうした出来事（はからい）を通して、彼は過去を相対化するとともに、未来への期待を抱くことが可能となったのではないか。それが語りの形式の変化にも表れているのではないか。

4. まとめ

ふるさとの会の共同居住では、年齢や障がい、疾病別に特化することなく、そのままいわば「ご

ちゃまぜ」なかたちで利用者の方々は生活している。この雑多性のなかでこそ、支えつつ支えられるという支えあいが生きていくことになる。もちろん、ときには喧嘩やいざこざが起こったりもする。しかし、そんなときにこそ、ミーティングを開いて、背景にある当事者のつらさの共有を起点として、「しょうがないよね」、「つらいよね」というところから仲間の獲得につなげてゆく。そうすることで排除に転化しない包摂性をつくってゆく。

「共同性の回復支援」で仲間をつくること——生きづらさを抱えた方々を地域で支えていくためには、このような「支えあいを支える」試みこそ重要であるとわれわれは考えている。